

第6講：113 「子守歌」

おやさと研究所主任
堀内 みどり Midori Horiuchi

113 「子守歌」

教祖は、時々、次のような子守歌をお歌いになっていた、という。

一、弁慶は、有馬の国で育てられ、三つの上は四つ五つ、七つ道具を背に負い、五条の橋にと急がれる。

二、甚二郎兵衛は、手盥持って、釣瓶で水を汲んで、手水使うて、神さん拜んで、シャンシャン。

梶本宗太郎が、二十代の時に、山沢ひさから聞いたものである。

はじめに

教祖がどのような時に、どんな節回しで歌っておられたか。「子守歌」としてお歌いになられたなら、子どもをあやされていたのだろうか。そのような年少の子どもが教祖のところに来た時には、そうした唄を唄われたのだろうか。ふとしたときにお一人で口ずさまれていたのだろうか。ここでは、上村福太郎が残した『教祖の御姿を偲ぶ 改訂新版』も頼りに、逸話に伝えられたその教祖の姿を想ってみた。

113 「子守歌」に歌われているもの

「一」の弁慶の七つ道具と弁慶が有馬で育ったことが唄われる。有馬には須磨寺や書写山圓教寺に縁のものが残されていて、弁慶は圓教寺で7歳～17歳の10年間、修行したとされている。「二」では「甚二郎兵衛」という人が「神参り」するときの手順を「シャンシャン」と陽気に唄っている。こうした歌詞が天理界限で唄われていたかどうかについて不明であるが、天理には「弁慶のもっこ塚」があったと伝えられている。弁慶は庶民の間でもよく知られていたということだろう。ここでは、教祖がどんなことを歌われたかというよりは、そうした「ご様子」を山沢ひさは懐かしさとともに、梶本に伝えたのだと思う。38「東山から」も、教祖がよく口ずさんでおられた歌を伝え、教祖のご様子を垣間見ることができる。

盆踊りと正月

『教祖の御姿を偲ぶ 改訂新版』の中で著者の上村福太郎は、教祖を想うことは「懐かしい」と綴り、上島かつの三島神社の「盆踊り」の思い出が明治14、15年の頃のことと思われるとした上で、この盆踊りを教祖と関連して考えるのも「懐かしいことのひとつ」と誌す。明治12年に小二階ができ、13年には鳴物を入れての「おつとめ」の急き込みがあり、そのために秀司は金剛山地福寺に赴き、「転輪王講社」を開筵した。16年には村人の懇願を受け「雨乞づとめ」を盆の2日前に行い、その成果のために勾引、17年の奈良監獄署へのご苦勞も盆の頃のことであった。そうした人々の楽しみの夜の教祖は、「思うだけでも懐かしい」と言う。上村は「あらゆる圧迫の中を、世界の子供たすけたい一条の教祖の御心は、赤衣の色と一つになっていよいよますます燃えつづけられるのであった。」と述べ、また正月の風景を想起し、「雪に埋もれたお屋敷の元朝、赤衣を召された地上の親神教祖を中心に、当時のあたたかい情景をしのびして頂くさえ懐かしいきわみである。」と綴っている。

梶本宗太郎

梶本宗太郎は、梶本松治郎（初代真柱の兄）の子で、教祖の曾孫にあたる。山沢ひさは、お婆である。逸話篇192「トンビトート」、193「早よう一人で」も梶本宗太郎の思い出である。

「192 トンビトート」

明治十九年頃、梶本宗太郎が、七つ頃の話。教祖が、蜜柑を下さった。蜜柑の一袋の筋を取って、背中の方から指を入れて、

「トンビトート、カラスカーカー。」

と、仰っしゃって、

「指を出しや。」

と、仰せられ、指を出すと、その上へ載せて下さる。それを、喜んで頂いた。

又、蜜柑の袋をもろうて、こっちも真似して、指にさして、教祖のところへヒョーッと持って行くと、教祖は、それを召し上がって下さった。

192「トンビトート」は、113「子守歌」や38「東山から」と似たような雰囲気を感じられる。子どもに対する優しい心、子どもと芯から楽しそうに過ごされている姿が目につかぶ。19「子供が羽根を」は、教祖が、「正月、一つや、二つやと、子供が羽根をつくようなものや。」と言って、「おつとめ」を教えられた様子を伝えている。数え歌のように誰にでも分かりやすく、覚えやすいようにと教授されたのは、そうした唄を好まれたのかも知れない。教祖と子ども

梶本宗太郎が伝える193「早よう一人で」の逸話には、「教祖にお菓子を頂いて、……子供同士遊びながら食べて、なくなったら、又、教祖の所へ走って行って、手を出すと、下さる。食べてしもうて、なくなると、又、走って行く。どうで、『お祖母ちゃん、又おくれ。』とでも言うたのであろう。三遍も四遍も行ったように思う。それでも、『今、やったやないか。』というようなことは、一度も仰せにならぬ。又、うるさいから一度にやろう、というのでもない。食べるだけ、食べるだけずつ下さった。」と教祖の姿が描かれている。同様の話は上村の著書の中にも収められている。中山もとは「……御母堂様と私と二人して、……『お婆あさん、何ぞください』と申しました。すると教祖は右手をひたいあたりに弓型におかざしになって、『だれどや。あ、玉さんらやな』とにこにこ仰せになると、ご自分で袋柵をおあげになって掴んできてくださった……たべてしまうと、もうまたすぐに、『お婆あさん、何ぞください』と二人して教祖のおそばにまいるのです。そうすると教祖は、今やったばかりやないか、と一回もおっしゃったことがなく、『よし、よし』と申されて、またご自身で立って行って掴んできてくださいました。」と語っている。また、宮本ていは子どもの頃に具合が悪くなると教祖を訪ね、教祖が「にこにこことなされながら、『どれどれ』とおっしゃって、私の手なら手を御自分のお手にお取りになって息をかけて下さいました」と語っている。こうした教祖の子どもへの接し方からすると、教祖は子どもを芯から愛おしく、対応も丁寧だったことがわかる。

おわりに

教祖がどのような声でどのような節回しで、そしてどのようなテンポでお唄を歌われたのだろうか、そのお歌を聴いてみたいという気持ちが今も残ったままである。同時に、経済的に困窮され、社会的な圧迫の中で、終始一貫として「おやさま」（親さま）であったことを確認したように思う。教祖にとっては、すべての人々が「可愛い子ども」であるから、それは当然のことだとも言えるが、教祖「ひながた」のありようが、「子ども」の思い出を通し、「逸話」として生きている。上村の「懐かしい」という叙述は、教祖が身近にいてくださるということを語っているように思われる。